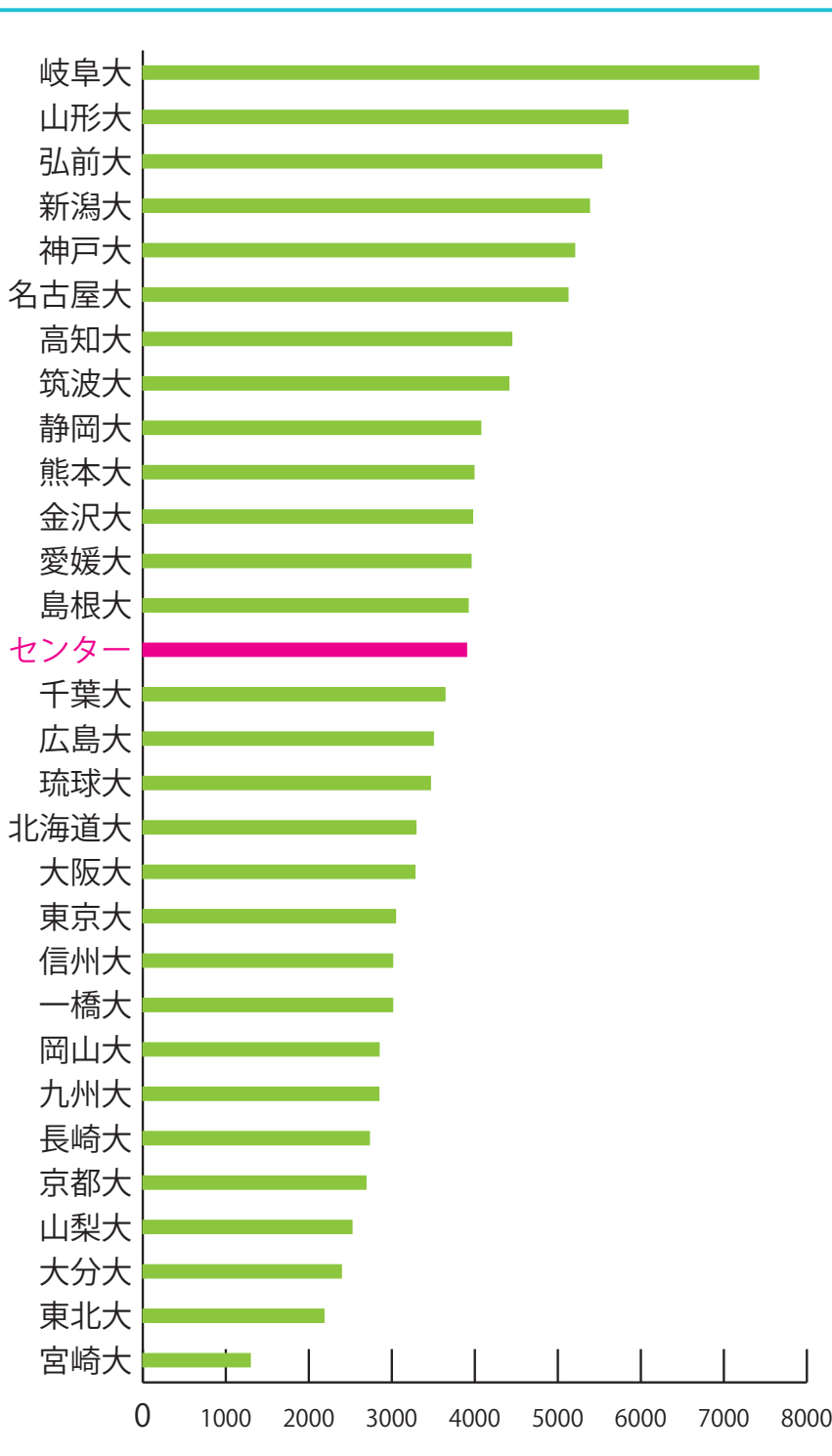




## 国立大学二次試験【評論】字数調べ



下のグラフは、主な国立大学二次試験【国語】で出題された評論の過去3年の平均字数です。  
(桐原書店調べ。内容から「評論」と判断できる文章を対象としています。)



### 入試評論の字数

センター試験の評論の過去3年平均字数は約3900字です。国立二次試験の評論がセンターと比べて必ずしも長いわけではないことがわかります。センターよりも短い2000～3000字台の出題がある一方、センターを超える字数の出題もあります。国立二次といっても大学ごとに大きな違いがあるのです。

### 字数が多い＝難しい？

難関大学といわれる東大や京大、東北大などは字数が少ないのが特徴といえます。設問形式、設問数なども関係しますが、字数の多さだけでは難易度がはかれないことがわかります。

### どう学習するか？

センターの4000字を一つの目安にして学習するのがおすすめです。4000字以上の長文では、時間を気にしながら学ぶことが重要な要素になってきます。

国立大学二次試験の国語は、ほとんどが記述問題ということもあるので、記述する量、設問数も時間配分には大きく関わってきます。

字数の感覚を身につけておくことは、入試対策の大きなポイントといえるでしょう。



# 英文校閲者のひとりごと③

桐原書店の英文校閲担当者（アメリカ出身、在日歴長め）が日本で感じたちょっとしたことをつぶやきます。

## The 5 p.m. Chime on Tanegashima



When I first came to Japan in 1992, I lived on a southern island called Tanegashima. Everything was new to me back then. With my limited Japanese, even ordering a bento at Hokka-Hokka Tei was a small adventure.

I lived with my aunt and uncle in the downtown area of Nishi-no-omote, the largest city on the island. I was curious about something that happened each day at 5 p.m. There were huge speakers on a tower near our apartment. Every evening, music from the speakers played for 30 seconds. It was the same sad and lonely song, and the sound echoed through the streets. What was that song? And why did they play it at 5 p.m. every day? What did it mean?

Much later, I learned the song is called “Yuyake Koyake,” and it tells children that it is time to go home.

I am much older now, but I still live in Japan, in Tokyo, and they play the same tune here at 5. The interesting thing is that I don't hear it all the time. It depends on the weather conditions. But sometimes, when the wind is just right, I can hear that familiar melody again. And it reminds me of those bittersweet days on the island when I was a younger man wondering what I was doing in Japan, and where I would go next.



自身で描いた種子島の風景

## 日本語訳 種子島で聞いた午後5時のチャイム

1992年に初めて日本にやって来たとき、私は種子島という南の島に住むことになりました。当時の私にとって、すべてが新鮮でした。限られた日本語で、「ほっかほっか亭」でお弁当を注文することすら、私にとってはちょっとした冒険でした。

私は叔父叔母とともに、島で最大の町である西之表市の中心街に住んでいましたが、毎日午後5時になると起こることが不思議でありませんでした。私たちの住んでいるアパートの近くにある塔の上にとっても大きなスピーカーが取り付けられてあり、毎日夕方になると、そのスピーカーから30秒ほど音楽が流れてきたのです。それはいつも同じ、哀愁をおびた曲で、それが町中に響き渡ったのです。あの曲は何なのだろう。それに、どうして毎日午後5時になると流れるのか。あれにはどんな意味があるのだろう——そうしたことが謎でした。

私はずっとあとになって、その曲は『夕焼小焼（ゆうやけこやけ）』と呼ばれるもので、子どもたちに家に帰る時間だよと知らせるものだということを知りました。

その時から私はずいぶん年をとりましたが、今も日本に、東京に住んでいます。そして、ここでも5時になると同じ曲を流すのです。おもしろいのは、それはいつも聞こえるわけではなく、気象条件に左右されるということです。風向きがちょうどよい具合の時には、あの懐かしいメロディーをまた聞くことができるのです。すると私は、あの島に住んでいた頃のほろ苦い日々のこと——私がまだずっと若くて、自分はいったい日本で何をしているのだろうか、次はどんなことをしようかと、あれこれ考えていた頃のことを思い出すのです。

